

激動の現代、歴史をどう学ぶか

——市民のための歴史学入門——

京浜歴史科学研究会では一月二六日に行われた第八回総会の記念行事として、公開シンポジウム「私たちの地域史」を開催した。その折、講師として新井勝紘氏（国立歴史民俗博物館助教授）をお招きし、「地域と博物館」と題するご講演をいただいた。氏が手掛けておられる、歴史学の到達点に立脚した近現代史の資料館づくりが、東アジア・東南アジアなど近隣諸国はもちろん、国際社会への配慮が必要ならばかりか、国内での政治問題までもが絡んでいかに難しいかということを感じさせられた（『京浜歴史科学会報』第九四号）。

当時、当会の学習活動が、特に明治期の史料を読んできて、その成果らしきものもなかなか打ち出し得ず、さらに今後の見通しも立てられない、いわば行き詰まりの隘路に陥っており、それをこの時の新鮮な感動から、何とか打開し、少しでも活動の方向が見出せればと考え出されたのが今回の企画であった。

全六回にわたる講座の題目と講師は以下の通りである。

- | | | | |
|-----|-------|--|------|
| 第一回 | 四月十一日 | ガイダンス「戦後歴史学が歩んできた道」 | 松田隆行 |
| 第二回 | 五月 九日 | 「大学では歴史をどう研究しているか」
一橋大学助教授 | 吉田 裕 |
| 第三回 | 六月 六日 | 「いま世界史をどうみるか」
歴史教育者協議会研究委員 | 鳥山孟郎 |
| 第四回 | 七月 四日 | 「地方史研究の足跡をたどる」
市川市立市川歴史博物館学芸員 | 吉田 優 |
| 第五回 | 九月 五日 | 「地域で戦争を語りつぐ」
戦時下の小田原地方を記録する会会員 | 井上 弘 |
| 第六回 | 十月 三日 | 「歴史の教師は子どもたちに何を伝えたいか」
法政大学第二高等学校教育研究所所長 | 渡辺賢二 |

まず、戦後歴史学の流れを、本会事務局員中、最若手の松田氏に要約してもらった。現在、大学院生として専門的に研究されている立場からの言及であり、参加者それぞれに違った印象を与えたものようである。その時代に生き、歴史を皮膚感覚として認識している者と、後世、書物等で読み取る努力をしなければならない者とのギャップが大きいのは当然のことといえよう。

吉田裕氏には大学での歴史学研究の現状を、専攻されている戦争責任問題を中心にお話しいただいた。日本における戦争責任の追及が、ドイツにおけるそれに比べて不徹底に終わっている点を、ひとつのこだわりとして研究を深められている氏からは、その理由として、戦後、保守派による戦争責任の棚上げを許す国際環境があったこと、天皇およびその周辺の宮中・外務省・海軍等、「穏健派」についての評価に対する見解の対立などの問題点が紹介された。戦争責任の問題は、単に現在の感覚から加害責任を追及すれば良いというものではなく、その時代を生きた方々の実感や価値観を理解した上でこれに当たらなければ、かえって講座などに寄り集って来られた一般市民の反感を買うことにもなりかねないという微妙な問題を含んでいる。さらに研究上の問題として、日本における情報公開の立ち遅れが研究を推進していく上での障害となっていること、近年、市民の手による戦争体験記の出版が増加しているのは歓迎すべきことなのだが、史料的价值の高いこれらの出版物が自費出版・地方出版であるため、入手が困難な場合も多く、自ずから地方の図書館・資料館等の重要性が高まるにもかかわらず、必ずしもその需要を満たすだけの対応がなされているとは言えない現状にあることなどが指摘された。また、大学では院生自体の減少、過去の研究成果・研究課題に対する

教授と学生間の意識のズレなどの問題を抱えているということである。

ソ連の消滅など、社会主義諸国の崩壊が報じられ、もはやマルクス主義的發展史観など従来の歴史観では捉えきれなくなった世界史を、今後どのように構成していったら良いか、といった観点から語っていたのが鳥山氏である。氏は高校での授業や一般市民対象の公開講座、東アジア歴史教育シンポジウムなどの経験から、日本の戦争責任・民族・東アジアの近代化などの問題を取り上げられた。湾岸戦争にみられた発展途上国の国益追求から引き起こされた戦争がアメリカのリーダーシップの下、多国籍軍によって敗退させられたという現実からみると、もはや「協力」の発想に欠ける国益追求は、国際社会のそしりを免れ得ないものとなったことが感じられる。日本の進むべき道は、従来の対米従属、また単なる国連崇拜などから脱した独自の道として追及されるべきものであろう。

当会の活動からヒントを得て、市川市で「市史を音読する会」を主催されているという吉田優氏には、地方史研究協議会の歩みを中心とした戦後地方史研究の推移と、博物館を中核として地域に根を下ろした市民運動の一例としての経験をお話いただいた。戦前の「あしき郷土史」からの脱皮をめざしてスタートした地方史研も、実際には「玉石混淆・種々雑多」な状態であった。「日本史研究の基礎たる地方史研究」を目的とする共通認識も次第に重荷となつてきて、「縁の下の力持ちばかりが地方史研究でもあるまい」という声が聞かれるようになり、「郷土史の良さ」の見直しの必要性も感じられているという。本会の活動母体である「県史を学ぶ会」では『神奈川県史』の資料編を輪読するスタイルを採っている。これに対し、市川市では通史編の方を音読し、多数の参加者を維持しているという。本会では広く一般市民の参加も呼び掛けてきたが、結局、参加者が少数で固定化してしまっているという問題を抱えている。何とも羨ましい限りである。それはさておき、その熱心な参加者の参加動機を尋ねてみたところ、ある会員から「生きている証」を求め、という発言があったという。本会でも創立初期の市民参加者

から「より良く生きるために」歴史を学びたい、という発言があり、その言葉に本会のひとつの存在意義を認めてきたという経緯がある。活動を継続するにあたり、初心に立ち返るの必要を感じる。

井上氏からは戦争体験を記録する実践活動と「記録する会」の全国的な動向をお聞かせいただいた。単に空襲などの被害者体験だけではなく、加害的側面も採録しようと心掛けておられるが、やはりその性格からの困難さもあるという。また、記録の形式として本人による手記は避け、あくまでも会員による聞き取りに徹し、事実としての信憑性を追及しようと努力されている。「地域は世界の縮図である」ということをこの活動を通じて感じられたという。戦争体験者が高齢化している現在、その史料の価値判断や利用方法はさておき、今が記録を残す最後の機会だということのも事実であろう。また、戦争遺跡や遺品、記録類の保存という問題も、資料館を持っている行政側の対応も含めて考えていかなければならないことである。

最後に家永教科書裁判で証人をも務められた渡辺氏には法政二高での授業実践を通じての歴史教育論を語っていただくことになった。暗記中心の授業への批判から、近年、子どもが動く授業、討論形式の授業などが脚光を浴びている。しかし、それで本当に生徒の自発的歴史認識が育てられるのか、という疑問が根強く存在するのも事実である。そうした中で氏の授業論は、やはり「覚えさせる」ということは当然基本に置き、歴史学の水準を理解した上で、それを生徒の次元に合わせて教材化を凶る教材研究の重要性を強調し、それによる授業からさらに学んでいくという複次的なものであった。当日は、授業で実際に使用された実物教材も示していただけだが、その旺盛な資料収集の姿勢には脱帽せざるを得ない。参加者から当会には教員が少なからずいるが、こうした授業論を聞かされたことがない、というつぶやきが洩らされた。これは当会の学習活動が実際の教育内容とかなりかけ離れたものであったという証明に他ならないのではなからうか。

(伊東富昭)